

パネルディスカッション



～地域での活動事例の紹介～

発言要旨

- ・門出健一氏(社団法人 有馬温泉観光協会 青年部リーダー)
「有馬温泉が持つ温泉の力とそれを生かした観光まちづくり」

有馬温泉観光協会青年部は現在17名で構成されている。
有馬に来ていただいたお客様が楽しめるイベントを企画したり、活動のPRを行っている。
お客様のニーズに合った活動をしていかなければならないと考え、取り組みを進めている。
現在涼風川座敷を実施している。
有馬温泉全体の取り組みとして、活性化に寄与していきたいとの思いで、青年部は活動している。
有馬温泉の中でも様々な組織があり、意見の相違や温度差もある。青年部は、その組織同士のかけ橋
となって、有馬温泉を盛り立てていこうと活動している。

- ・小西篤信氏(大沢農業塾 塾長)

「大沢農業塾の取り組み」

～都市と農村の交流を目指して～

大沢町は、フルーツ・フラワーパークのある田園風景の広がる農村集落である。
人口の流入はなく、少子高齢化が進んでおり、その中で新たな就農は難題である。
これを踏まえ、平成12年7月に大沢コンパクトタウン研究会を立ち上げた。
まちづくり部会、交通部会、子どもに関する委員会、そして農業活性化部会の4つがある。
大沢農業塾は農業活性化部会の一つの事業である。
都会の人等、農業の初心者向けに農業技術を習得してもらっている。
4月から12月まで10か月間に9回の座学・実習が行われる。
平成15年から開催されており、155名の卒業生がいる。
その中でも、6名が就農しており、ブルーベリーなどを作っている。
少しでも大沢町を知ってほしい、そして心の故郷として愛してほしいと思っている。

- ・小島理沙氏(特定非営利活動法人 ごみじゃぱん 事務局長)
「減装(へらそう)ショッピング」

平成10年から18年にかけてゴミのリサイクル率は2割上昇しているが、総排出量は横ばいであり、いかにゴミを減らしていくかが叫ばれている。

ゴミの中でいちばん多いのは容器包装ゴミと言われており、全体の6割から7割を占めている。

容器包装には、輸送・貯蔵・分配の機能のほかに、情報伝達の機能がある。

容器包装は最高のマーケティング手段であると言われていたが、簡易包装、容器を少なくするようなマーケティングでゴミを減量することができないかと考えている。

消費者に簡易包装の商品に価値を認めて購入していただくことで、メーカーを簡易包装に移行させ、ゴミの発生自体を抑制することができる。

昨年東灘区の4店舗で減装商品の購入を促す「減装(へらそう)ショッピング」社会実験を実施した。

実験によるゴミの削減量は1.2トン、CO2削減量は2トンに達した。

11月中旬からは北区のジャスコ筑紫が丘店で「減装(へらそう)ショッピング」社会実験を実施する。

北区の皆様とゴミ減量の伝説を作って全国に成果を発信していきたい。

- ・加邊達士氏(社会福祉法人 フレンド 農でデザインする福祉のまちづくりコーディネーター)
「農でデザインする福祉のまちづくり事業」 ～地域とともに新たな働き方を求めて～

ここ数年で障害者の新規就労希望者は増加しており、5年で1.5倍ほどになっている。

これまでの単に仕事を受注するだけでなく、自ら事業者として事業を展開していくことが求められている。

北区の農業従事者は65歳以上の高齢者が60%近くにのぼり、担い手不足である。

この、働きたい障害者と、担い手不足の農家をマッチングできないかと考えたのがこの事業である。

7月11日にはフルーツ・フラワーパークで、このプロジェクトの発足シンポジウムを開催し、徳島県上勝町で葉っぱビジネスを展開する横石知二さんの講演があった。

80人くらいの生産者の平均年齢は70歳であるが、2億4千万円の売り上げがあり、医療費は四国最低水準である。

生涯現役で働けることが大切であり、「後期高齢者」を「好機高齢者」に、との話があった。

北区では、淡河町の上野丘更生寮が減反の畑を借上げ、農作物を生産し、収益をあげている。

また、フレニードという事業所では稲作の補植作業を行っている。

そのほかに、淡河農園クラブで生産された野菜を大池(びよびよ)で直売している。

これから、地域のコミュニティを大切にしたい事業を展開していきたい。

そのためには、市民のサポートや協力を願いたい。

- ・石岡由紀氏(神戸親和女子大学 子育て支援センター長)

「行政と大学が連携した子育て支援実践」 ～神戸親和女子大学子育て支援センター「すくすく」のあゆみをとおして～

「すくすく」は、市と大学が連携した新たな子育て支援事業であり、全国に先駆けて神戸親和女子大学が昨年1月に設置した。

子育て支援センターのプログラムは、デイリープログラム・ウィークリープログラム・スペシャルプログラムの3つの柱で構成されている。

デイリープログラムは、未就園児の親子を対象とし、保育アドバイザーのいるセンターの中で、子どもが遊

べるスペースを確保し、保護者の相談を受けたり、保育アドバイザーや学生ボランティアによる手遊びや絵本の読み聞かせなどを行っている。

ウィークリープログラムは、1歳半から未就園児の親子を対象とし、3か月間、週に1回、学生が中心となりプログラムを考え、ふれあい遊びなどを行っている。

スペシャルプログラムは、地域の親子を対象とし、料理教室や、保健師による発達相談会を行っている。開設以来6月末で利用者は9,426人にのぼる。

学生ボランティアも約1,200人に達し、大きな力として事業に活躍してもらっている。

地域の皆さんに愛され、これからも活動を継続していきたい。

～北区の将来像について～

意見交換

有村) 今後の北区のまちづくりに対して、それぞれの活動をどのように発展させていきたいか、また、パネリストが取り組んでいる活動が相互に連携すれば、もっと発展的な取り組みができるのではないかと気づいた点はないか。

小島) 容器包装ゴミ削減実現に向けた、「へらそう宣言都市」にしたいと考えている。

加邊) 有馬温泉は大きな市場であるので、地元の野菜をどんどん使ってもらうようにアピールしていきたい。

門出) 有馬温泉単体ではなく、大きな範囲で協力していきたい。有馬温泉は、予防医学の観点からも世界が注目している。医療水の認定基準を9項目のうち7項目も基準を超えている世界でも珍しい温泉である。貴重な温泉であることをもっと知っていただきたい。

小西) 大沢町は農村地域であり、農業の活性化が一番であるが、高齢化が進んでいる。作業をサポートする援農隊が作れたらと考えている。加邊氏の事業も注目しており、積極的にサポートしていきたい。

石岡) 地域や行政の方に支援していただいてやってこられた。地域の方に育てられている学生が地域の子どものサポートをする。そういうサイクルを広げていきたい。

有村) キーワードは「楽しみながら」ではないか。楽しみながら北区がどんどん前向きに発展していけばいいと思う。

矢田市長) 今まで4区で開催されたが、非常に現実味のある、創造的な発想を聞いたのは初めてである。わくわくするまちづくりが始まったのではないか。推し進めて、より北区らしい取り組みにつなげてほしい。